



Title	MTC政治部とコルホーズ：労働規律問題を中心に
Author(s)	富田, 武; Tomita, Takeshi
Citation	スラヴ研究, 35, 25-54
Issue Date	1988
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5172
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113285.pdf



MTC 政治部とコルホーズ

— 労働規律問題を中心に —

富 田 武

はじめに

1933年1月の全連邦共産党（ボリシェヴィキ）中央委員会・中央統制委員会合同総会決定をもって設立され、2年足らずの活動ののち34年11月中央委員会総会決定によって廃止された^{エム・テ・エス}MTC（機械・トラクター・ステーション）政治部は、1930年代ソ連の農政史および党史研究者の注目を集めてきた（ソフホーズ政治部は1939年まで存続し、MTC政治部は1941-43年に一時的に復活した）。ことに、スターリン批判後の歴史の見直しの中で、MTC政治部の抑圧的側面、つまり部長代理の一人が^{オ・グ・ピ・ウ}О Г П У（合同国家保安本部）より充員された点も含め、政治部活動が弾圧を伴ったことが明らかにされただけに¹⁾、注目を集めたのも当然であろう。

ところが、この20年余りMTC政治部の研究はさして進捗せず、その実態も必ずしも解明されていない。ソ連における研究は、スターリン批判に対する反動が始まった1960年代後半以降とくに成果を挙げておらず、政治部がコルホーズの組織的＝経営的強化と農村党組織の強化に貢献したという、30年代と本質的に同じレベルの議論にとどまっている²⁾。政治部を導入せざるをえなかった農村の危機（1932-33年冬の飢饉）も、政治部の活動の矛盾がついに廃止を余儀なくさせたダイナミズムも把握されていないのである。またMTC政治部が赤軍政治部をモデルとした以上、地方党機関の農政指導と衝突せざるをえないことや、懲罰機能を属性として備えることにも充分な関心が払われておらず³⁾、地区党委員会との軋轢は一時的なもの、弾圧もたんなる行きすぎとして処理されている。

他方、欧米の研究はMTC政治部自体の解明よりも、30年代政治史の文脈における解釈（政治部批判＝穏健派）に傾き⁴⁾、R. ミラーがMTC史の包括的研究書の一章を政治部に割いた程度である。彼は弾圧だけではなく、農村党組織の生産原則に基く改編という「建設的」側面も指摘しているが、実態分析が浅く、政治部廃止の論理を明らかにしていない⁵⁾。わが国では、① 17回党大会（1934年1-2月）前後の政策論争に関する考察の一環として、政治部の設立から廃止に至る概要を公刊資料を用いて初めて明らかにした塩川論文⁶⁾、② 政治部設立の過程を、わが国では入手しえない地方党機関の刊行物を駆使して、いっそう立ち入って分析した下斗米論文⁷⁾、③ 1931-34年の農村統治体制の再編とその特質 — 非常措置的な統治形態・方法と正規の党・ソヴィエト機関との交替、危機收拾に応じて後者が再建されても前者の「慣性力」が残り、次の危機のさい表面化する — という文脈に、政治部（前者の典型）設立・廃止を位置づけた内田論文⁸⁾が挙げられる。

このうち塩川・下斗米論文は、政治部と地区委など既存の組織との関係を主要な視点としており、政治部のコルホーズに対する指導にまで踏み込んで分析した内田論文にあっても、政治部の実態はいま一つ不明である。

たしかに、MTC 政治部の実態を分析することは、30年代（さらにはスターリン時代全体）に著しい情報の秘匿および政治的加工に加えて、ОГПУ 機関の活動を含むために、容易ではない。とはいえ、当時の新聞に報道された、断片的だが大量のデータを、雑誌論文その他の中の有意味なデータ、スモレンスク文書に含まれた連邦レベルの秘密文書、後代の有益な研究論文や回想とつき合わせて再構成し、MTC 政治部像を、その廃止の論理や農政史上の意義も、ある程度まで浮き彫りにすることはできよう。ここでは、ソ連の研究者のように、政治部の存続期間全体を俯瞰してコルホーズ指導の成果を数えあげる（欠陥も付け加える）のではなく、農業カンパニア（春播き、収穫・調達、秋播き等）に即し⁹⁾、とくに労働規律問題に焦点をあてて分析する。資料としては、連邦レベルの新聞・雑誌のほか、最大の穀倉地帯にして1932-33年冬の飢饉の中心地、政治部が最初に、かつ最も多く設立されたウクライナ、北カフカスの新聞¹⁰⁾、また、個別政治部の全体像を当時の出版物としては比較的率直に伝えている北カフカス地方ウスチ・ラビンスカヤ MTC 政治部に関する小冊子¹¹⁾を利用する。

なお、叙述にあたっては、上記三論文と重複する部分は可能なかぎり簡略にするよう努めた。また、農業カンパニアに即した分析が1933年に限定されるのは、後述するように1934年に入ると政治部に対する否定的な見方が党・政府内に広まり、報道が著しく減少したからであり、従って1934年については政治部存廃をめぐる議論へと分析を移し、もって本稿の総括とする展開をとる。

1. 政治部の設立と充員

1932年の穀物調達においてコルホーズ員大衆、それに農村党組織までも激しい抵抗に直面した党指導部は、北カフカス、ウクライナ等で赤軍兵士の動員を含む苛酷な弾圧を強行するとともに、それを制度化するものとして MTC およびソフホーズに政治部を設立することを、1933年1月7-12日の中央委員会・中央統制委員会合同総会で決定した¹²⁾。

「MTC およびソフホーズ政治部の目的と任務」と題する決定は、農村における反ソヴィエト分子の妨害活動とこれに対する党組織の警戒心の欠如、さらには同調を、抽象的ながら厳しい調子で糾弾している。政治部の任務は、MTC とソフホーズ、および MTC のサービスを受けているコルホーズの「活動と生活の全領域における党の監督と統制」におかれた。具体的な任務としてとくに強調されたのは、農産物の調達を、窃取やサボタージュの組織者に対する行政措置、懲罰措置をもって保障することである。コルホーズ、ソフホーズから反ソヴィエト分子を放逐することも重要な任務で、これら組織の統一が破れても、まず「ポリシェヴィキ的中核」を固め、その周りに非党員アクチーフ（積極活動分子）を結集し、再びコルホーズ、ソフホーズの多数を獲得していくとした点に、党指導部の危機意識の深さをみることができる。もとより他方では、政治部の活動の目的がコルホーズ、

ソフホーズの組織的=経営的強化にある以上、党員、コムソモール員の政治的再教育、またコルホーズ員、ソフホーズ労働者間での政治活動が主たる方法とされ、「むき出しの圧迫や行政命令的方法」をとってはならないとされた¹³⁾。

MTC政治部の組織は次のようであった。各政治部は部長（MTC所長代理）、「一般党活動」担当の部長代理2名、コムソモール活動担当の部長補佐1名から成る。のちに婦人活動担当の補佐1名と新聞編集者1名が加えられ、合計6名となった。政治部の上級機関は、地方・州農業部および共和国農業人民委員部に設立された政治支部（политсектор）であり、最上級機関は、連邦農業人民委員部に設立された政治本部（Политуправление）であるが、各レベルの党委員会にも従うものとされた。政治部長は政治支部、政治本部に従うとともに、当該地区党委員会メンバーであり、当該地方・州党委員会ないし民族党中央委員会の上申に基いて連邦党中央委員会が任命する¹⁴⁾。「一般党活動」担当の部長代理は実は、「党=大衆活動」担当の第一代理と、ОГПУ活動担当の第二代理から成っていた。第二代理にはチェキストが充てられ、政治部長に従うとともに、ОГПУ上級機関にも従うものとされた¹⁵⁾。

政治部の設立と充員はまずウクライナ、北カフカス、下ヴォルガ、つまり穀物調達への抵抗が最も激しかった地域から始まり、6月半ば（後述の6・15指令）までに基本的に完了した。もとよりMTC自体が増設されていたから、その後も設立・充員は続き、廃止直前の1934年秋には3500MTCのうち3368（96.2%）に政治部が設立された。1934年1月5日時点では2856MTC中2655（92.5%）に政治部が設立されていたが、地域別にみるとウクライナ24.3%、北カフカス12.2%、下ヴォルガ・中ヴォルガともに7.8%、中央黒土州6.4%、西シベリア6.0%等々であった。派遣・充員された政治部員は最終的に17,000名に達し、上の時点では12,251名であった。その中核となったのは最も堅固な、体制の支柱たるモスクワ、レニングラード、赤軍の党組織出身者で、政治部長（調査対象2,480名）の58%を占めていた（うち軍コミッサール出身は8.1%）。党歴でいえば、1920年までの入党者が78.8%を占めており、革命と内戦を経験した生え抜きのポリシェヴィキが派遣されたことがわかる¹⁶⁾。

ある政治部長の回想によれば、政治部長の候補者はモスクワに呼び出され、中央委員会の「小委員」（複数）や指導者たちとの対話で、長い時間をかけて選抜された。選抜された政治部長は中央委員会書記局および組織局の承認を得たのち、支給された仕立ておろしの軍服を着て任地へ向った¹⁷⁾。「農村は知らないが、入念に、しっかりと活動し、細かなことにも関心を払い、ポリシェヴィキらしく頑張ればよい」というのが、すべての政治部長に共通の気持だったように思われる¹⁸⁾。

2. 1933年春播きカンパニア

政治部が活動を開始したのは、南部では春播き準備の時期であった。春播きカンパニアは、前年度の苛酷な穀物調達の結果、とくに南部の飢饉のために、その準備から極度に困難な条件のもとにおかれていた。ウクライナでは前年度の穀物調達さえ完了しておらず、

北カフカス、下ヴォルガの種子収集も遅れていることが、2月5日付『プラウダ』論説で厳しく指摘された¹⁹⁾。

種子収集の遅れは「クラークのサボタージュ」、具体的には、調達に対してと同じく穀物を穴に隠す方法によるものとされ²⁰⁾、これを打開すべく穀物調達におけるのと同じ強権的措置がとられた。1月23日付人民委員会議・党中央委員会指令「北カフカスにおける春播き組織化について」は、種子収集を「必要な場合は穀物調達と同じ方法で実施する」と暗示的に述べているが²¹⁾、それが「黒書(чёрная доска)」掲載措置にほかならないことは直ちに明らかになった。すなわち、種子・食糧貸付を停止し、コルホーズから粛清されたサボタージュ組織者および個人農のサボタージュ者を北方へ追放する措置である。しかも、この措置がとられたのは北カフカスばかりではなかった²²⁾。

このような強権的措置、また他方における模範的コルホーズ員の称揚(2月16-19日第1回全連邦コルホーズ突撃作業員大会)にもかかわらず、種子収集の進展ははかばかしくなかった。そこで党・政府は2月25日、ウクライナ、北カフカスのコルホーズ、ソフホーズに対して国家種子フォンドから大量の種子を貸し付ける指令を出さざるをえなくなった²³⁾。この結果、種子収集は3月1日時点で計画の87.6%に、4月1日時点で95.1%に達し、ようやく完了した²⁴⁾。

春播きの準備としてはこのほかトラクター修理、牽引用馬の世話、コルホーズ作業班^{フリガータ}の組織化があるが、前二者はそれぞれМТС職員、馬丁の粛清を伴ったので、行論の都合上のちに触れることにする。作業班の組織化は、たとえば北カフカスについては3月11日時点で遅れているとされたが²⁵⁾、そもそもコルホーズ員が社会化経営の仕事に出るのに消極的だったのが実情である²⁶⁾。そこで、1月30日付中央執行委員会決定「コルホーズ強化について」は労働規律を確立すべく、1930年模範アルテリ定款に以下を補足することを定めた。「コルホーズ員が正当な事由なく、コルホーズから委ねられた仕事の遂行を拒む場合、管理部は当人に5作業日(трудодень)分までの罰金を課さねばならず、再び拒んだ場合は当人をコルホーズから除名しなければならない。」²⁷⁾ こうした“ずる休み”(злостный прогул)対策に加えて、播種前にコルホーズを離れて都市へ出かけ、収穫期に戻って収入分配に与かろうとする“渡り者”(легун)対策として、国家機関とコルホーズとの契約によらない出稼ぎは、除名をもって禁止された(3月17日付中央執行委員会・人民委員会議指令)²⁸⁾。

さて、3月20日ごろ南部で始まった春播きの大まかな推移は、計画面積に対する播種面積の割合を10日間ごとに示した次頁の表にみる事ができる²⁹⁾。

4月15日時点の春播き経過報告には解説が付してあるが、それによれば昨年に比してスタートは「悪くない」。中ヴォルガ、中央黒土州では「播種は申し分なく展開されている」。ウクライナ、北カフカスでは過去5日間テンポがいくらか落ちている。それは悪天候にもよるが、主要な原因は多くのコルホーズにおける「低い労働規律」にある。解説は「圃場、コルホーズ作業班における大衆活動の矛先は怠け者(лодырь)、欠勤者(прогульщик)との闘いに、ポリシェヴィキ的規律に、播種の高いテンポおよび質に向けられねばならない」と結ばれていた³⁰⁾。

表 1933年春播き経過（主要穀作地域，％）

	4月15日	4月25日	5月5日	5月15日	5月25日	1932年 5月15日
ウクライナ	17.0	25.6	41.3	62.0	75.6	42.4
北カフカス	17.9	28.4	42.3	61.7	75.2	67.5
下ヴォルガ	24.1	35.3	50.3	67.5	81.8	60.5
中ヴォルガ	17.9	36.4	62.7	85.1	100.0	66.6
中央黒土州	11.5	22.4	32.6	52.3	72.5	38.7
全連邦	10.9	19.7	36.7	55.9	75.1	42.7
コルホーズ	12.8	23.0	40.8	61.2	80.0	48.4
面積（千ha）	10,363	18,671	33,915	53,075	71,299	43,781

出典：注29)

春播きにおける労働規律向上策としては、先述の1・30決定、3・17指令のほかに、共和国・地方・州ごとに補強的なものが定められたようである。たとえばウクライナには、4月9日公表の「臨時コルホーズ労働規則」があり、上記決定・指令の手続き的側面を規定し、作業班間の“渡り”や子どもを仕事に出す“身代り”をも禁止するとともに、これを作業班の強化と結びつけ、班メンバーの固定や出退・休憩、班長の権限に言及している。同時に「コルホーズの仕事のない時間にも、コルホーズ員は自己の宅地付属地（приусадебный участок）で働くことができる」との配慮も注目される³¹⁾。他方、北カフカスの補強策は厳しいものであった。3月17日付地方党委指令によれば、労働規律の違反者は食糧援助停止、コルホーズからの除名をもって処罰し、悪意のケースはロシア共和国刑法典58条14項（国家転覆ないし法令反対の教唆）や「社会主義財産保護法」の違反で裁判にかける（最高刑は銃殺刑）³²⁾。さらに3月25日付指令は、多くの地区でコルホーズ作業班が夜になると村へ帰り、朝は遅く仕事に出てくる、馬やトラクターを遊ばせている等の「きわめて醜態な仕事ぶり」を指摘し、三つの作業班を「黒書」に掲載した。種子貸付・食糧援助を停止し、班から粛清された怠け者、寄食者（тунядец）を「連邦北辺へ追放する」という懲罰である³³⁾。

こうした措置がある程度奏効したのであろう、4月11日付『モーロト』論説は「労働における鉄の規律とは、仕事に完全に出ることだけでなく、作業ノルマを誠実に達成、超過達成することである」と述べ、北カフカスにおけるカンパニアの重点がノルマ達成、作業の質の向上、そのための競争に移りつつあることを示した³⁴⁾。連邦レベルでは、4月12日付『プラウダ』論説が、カバルディノ・バルカル自治州（北カフカス）や中ヴォルガにおける怠け者との闘いを讃え、「先進的コルホーズ員は数十、数百の地区で、無規律の現われ、集団意志への不服従……を威嚇する雰囲気を生み出している」と評した。春播きカンパニアが軌道に乗り始めたとき党指導部が判断したことを示している。そのことは、怠け者に対する敵意が行きすぎ、故意でない欠勤者までコルホーズから追放した場合もあるとし、誤りと指摘している点からも首肯されよう³⁵⁾。

5月4日付『プラウダ』は早くもタタールの春播き成功を大きくとりあげ³⁶⁾、15日付同

紙には、主要穀作地域のうち最初に計画を達成することになる中ヴォルガの^{クライ}地方党委第一書記シュブリコフの論文が掲載された。論文はまず成功の要因として「数百万コルホーズ員大衆の勤労意欲」と「党組織による同志スターリンの指示実現の努力」を指摘し、ついで具体的措置を挙げている。① コルホーズ員個人所有の牛の牽引力としての利用（馬不足を補う）、② 作業班の活動、とくに野営の導入、③ 欠勤との闘い、④ 馬の効率的利用と世話の改善、⑤ 財産保護、とくに種子窃取との闘い、以上である。論文は、天候とそれに対処する農法にまで関心を払う点でも際立っており、また作業班内の^{ズヴェノ}伍（ЗВЕНО）の組織化、トラクターの稼働、さらに個人セクターの播種の遅れにも注意を向けている。政治部の活動は簡単に触れる程度で、とくに称揚せず、また「若干の地区委員会にはなお行政命令的方法の要素がある」と、コルホーズ指導の問題点をさりげなく指摘している³⁷⁾。

2日後の『プラウダ』には、中ヴォルガ地方ベゼンチューワ MTC 下のコルホーズ突撃作業員たちによるスターリンへの二度目の手紙と、第1回中ヴォルガ地方コルホーズ突撃作業員大会におけるモーロトフの演説が同時に掲載された。前者は、春播きを5月12日に完了したこと、春播きの過程で労働規律が確立し、怠けは「村から畑に移った」（ともかく圃場には出る）こと、農作業の質にも関心を払い、同志スターリンのスローガン「コルホーズ員を豊かに」の実現に努めていること、最初の手紙で要請して派遣された「政治部の巨大な意義を実感している」こと等を述べたものである。後者は、中ヴォルガでなされたとはいえ全連邦的な意義をもつ演説で、タタールと中ヴォルガの春播き計画達成を賞讃する一方、北カフカスおよびウクライナの一部は遅れていると指摘している。演説の要点は、「数百万コルホーズ員大衆のコルホーズ労働、従ってまたコルホーズへの態度は急速に好転した」こと、また「個人農の広範な層の気分が変化した」（コルホーズへの敵意をなくし、加入を望むようになった）こと、そして「われわれの任務は大量弾圧（**массовая репрессия**）ではなく、むしろ主として大衆の中での政治＝組織活動、敵の完全な孤立化にある」こと、であった。政治部への言及はなかった³⁸⁾。

モーロトフ演説は1月総会決定とは農村情勢の認識を明らかに異にしており、その転機は5月8日付モーロトフ・スターリン連名の秘密指示であるが、この指示の内容と意義は第4項で考察することとし、第3項では春播きカンパニアで政治部がいかなる役割を果たしたかを検討する。

3. 春播きにおける政治部

ところで、着任した政治部活動家が目のあたりにしたのは農村の惨状であった。少なくとも南部においては、北カフカス地方クルガン^{スタニーツ}ナヤ村の次のような状態を代表的とみてよい。「コルホーズでは農具が放置され、馬はきわめて痩せていた。しかも、誰もこのことを気にかけていない。人々は明日のことを考えていなかった。」³⁹⁾

政治部はまずトラクター修理、牽引用馬の世話、種子収集の指導に乗り出した。それら仕事の遅れは、苛酷な穀物調達の結果としての種子不足、また飼料不足による馬の大量斃

死 (массовый падеж) および栄養失調, そして飢饉による人々の無力化の帰結であるにもかかわらず⁴⁰⁾, クラークの策動のためと扱えられた。そこで政治部の指導は, トラクター手をはじめとする MTC 職員やコルホーズの馬丁, さらにコルホーズ議長, 作業班長, また装置全体 (経理主任, 会計係, 倉庫係など) の粛清 (чистка) を伴い, むしろ先行させるものであった⁴¹⁾。政治部は先述の 1・23 指令の「断乎たる実施を保障する」ものとされた以上⁴²⁾, 1 月総会決定がいかに「むき出しの圧迫や行政命令的方法」に警告しようとも, それに傾斜するのは不可避的だったと見てよい。農業に疎いことに加えて, 「軍隊では客観的原因を挙げつらうことは禁じられている」と, 作業の遅れに対する弁明を許さなかった一政治部長の言葉に象徴される政治部活動家の軍人的メンタリティが⁴³⁾, 行政命令的方法, それに従わない者の粛清を増幅させたものと思われる。

しかも, 政治部の活動を支え, 粛清された者に代って仕事を積極的におこなうべきアクチーフを見出すのは容易ではなかった。アクチーフとは「作業日が多く, 昨年の穀物調達を突撃的に闘ったうえ, 春播きを立派に準備する」先進的コルホーズ員で⁴⁴⁾, しかも, 個人として働き者であるだけでなく, 「各人が隣人, 仲間の少なくとも 10 人に責任をもつ」ことを求められた⁴⁵⁾。アクチーフを見出すのが困難なのは, 政治部活動家が, 苛酷な穀物調達を強行した党・政府の全権代表であり, しかも他所者であることにコルホーズ員大衆が不信を抱いていたからにはかならない。政治部の初期の活動に関する報告は, コルホーズ員大衆が政治部召集の会議で沈黙を守ったこと⁴⁶⁾, さらにコムニストの中にさえ「政治部は ГПУ 機関だと思っている」者がいたことを指摘している⁴⁷⁾。

もとより, 政治部は「コルホーズからコルホーズへ, 馬舎から馬舎へ, 農戸から農戸へと巡り, 昼夜をわかつた活動した」(クルガンナヤ村)。そして, 後述する食糧の差別的分配を梃子として, 一部は復員兵士および旧赤色パルチザンの参加も得てアクチーフを結集しつつ⁴⁸⁾, MTC とコルホーズを粛清し, コムニストを生産現場に配置し, 労働規律の導入をはかった。たとえば, 北カフカス地方コルスンスカヤ村はすでに「黒書」掲載措置を受けていたが, 政治部は粛清を引きつぎ, 党員の 57% を除名した。ウクライナ・オデッサ州ラズヂェリャンスキー地区では, コルホーズ議長の約半数を更迭した⁴⁹⁾。先のクルガンナヤ村では, 政治部は馬の準備への「妨害分子に対する見せしめ裁判 (показательный процесс)」をおこなった⁵⁰⁾。

より包括的に共和国・地方・州レベルでみると, ウクライナの政治支部長の報告によれば, 政治部は MTC とコルホーズを粛清し, コルホーズ員大衆に作業日の意義, 労働に応じた分配の原則を説明し, アクチーフと協力して労働規律の「急速な向上」に成功した。春播きが始まると, 多くのコルホーズで仕事に出る者の割合は 100% に達した⁵¹⁾。政治部への充員が 3 月下旬だった中ヴォルガでは, 同地方政治支部長の報告によれば, 政治部は MTC とコルホーズを粛清し, アクチーフを結集した。コムニストの点検も厳しくおこない, ある政治部は, 春播きの作業ノルマを達成しないコムニストの一覧表を細胞会議, 非党員コルホーズ員集会の討議にかけ, 一貫してノルマを達成しない者を党から除名した⁵²⁾。

春播きにおける労働規律向上策, とくに北カフカスのそれは簡単にみてきたが, たんな

る命令、抑圧措置だけではコルホーズ員の労働意欲を引き出すことはできない。そこでウスチ・ラビンスカヤ MTC 政治部を例に、政治部による労働規律導入・向上の活動をやや詳しくみることにする⁵³⁾。

春播きが始まると政治部は各コルホーズ、とくに作業班に入り、また壁新聞を用いて怠け者との闘いを訴えた。ところが、コルホーズ員たちは、“怠け者”という言葉に反発した。これは、政治部が“怠け者”を掲示する黒板を作業班、さらには伍にまで持ち込んだ時に明白になった。黒板に名前を掲示された者はすぐに抗議し、仲間に恥をかかせた申立人(инициатор)を非難し、黒板付近では口論が絶えなかった。「コルホーズ員たちは、真面目な働きと不真面目な働き、働き者と怠け者、労働英雄(герой)と仮病使い(симулянт)、コルホーズ制度の友と敵とを区別する気には、なかなか出来なかった。」播種の始めの頃、多くの馬力作業班では黒板に何も書かれず、それは「チョークがない」せいとされた。コルホーズ員たちはまた、“怠け者”とは対照的に賞讃される突撃作業員(ударник)に対する、政治部による差別的優遇にも反発した。突撃作業員は別の大鍋(котёл)を与えられ、別のテーブルで食事をした。大鍋の中身はよく、カーシャも濃く、おかわり(добавка)はいくらでもでき、量に限りのある牛乳や、時には蜜も与えられた。「一部によいものを、残りの人々にまずいものを食べさせるのは不公平だ」というのが、公然と口にはできないが、コルホーズ員の多数の不満であった。しかし、政治部長によれば、「まもなく、この気分は打破された。真面目に働く者は誰でもこの大鍋に与えられること、大鍋の矛先は怠け者、仮病使いに向けられたものであることを理解した」。そして秋までには、コルホーズで一定の集団をなしていた“怠け者”は取るに足らない数になったという⁵⁴⁾。

すでにみた労働規律違反者に対する食糧援助停止や上の給食の差別的配分は、飢饉直後であるだけに、加えて春という時期からして宅地付属地からの収穫で代替できないだけに、少なくともコルホーズ員を社会化経営の圃場に引き出す効果があったことは否めない。この方法は北カフカスでは地方党委の公式の方針となり、『モーロト』の記事にも現われたが⁵⁵⁾、中ヴォルガ政治支部長の報告(12月28日付)等にもみられるから⁵⁶⁾、かなり普及したものである。この結果、コルホーズ員が仕事に出るようになったとの報告が各地から聞かれるようになった。たとえばウクライナ・ヴィンニツァ州の一政治部長によれば、春播き開始の時点で圃場に出るコルホーズ員は65-70%を下回っていたが、政治部による怠け者に対する闘争、作業班強化の結果、作業班長が「コルホーズ員を呼び集める必要はもはやなくなった」⁵⁷⁾。同様のことは、北カフカス政治支部長(シテインガルト)もアルマヴィール地区につき指摘している⁵⁸⁾。

しかし、再びウスチ・ラビンスカヤ MTC 政治部についてみれば、「コルホーズの労働生産性はなお低すぎた」。「常設作業班(постоянная бригада)強化のための闘いは、春播きでは大きな困難を伴った。」⁵⁹⁾ この点については当時の雑誌論文に次のような指摘がある。たしかに、春播きに向けて25コルホーズの大多数に作業班が組織され(計98:7,000名)、区画が一輪作期間固定され、労働規律が強化された。しかし、作業班には敵対分子が侵入していた(そこで「深刻な粛清」があった)ほか、以下の欠陥がみられる。① 作

業班が隣接農戸ごとに編成されていること、② 規模が大きすぎ（45～50名が望ましいが70名）、^{スツェノ}伍（農具利用の小単位）もないこと、③ メンバーが流動的であること（出稼ぎや班間の移動）、④ 区画、役畜、農具が十分に固定されていないこと、⑤ 各班に作物が均等に割り当てられ、各班がすべての作物を揃える「一種の閉鎖的経営」になっていること、⑥ 班長は個人責任を回避し、適切な作業計画をもっていないこと、等である⁶⁰。

ここでは作業班の問題にこれ以上立ち入る余裕はないが、最も先進的と称揚された政治部の指導でもこの程度の実情であった。5月31日付連邦農業人民委員部参与会決定も次のように述べている。「今日まで多くのコルホーズで常設作業班が定着せず、コルホーズ員の作業班内での大きな流動（самотёк）がみられる。」「作業班には規律がない。仕事に集まるのに2－3時間かかり、朝食・昼食の時間が非常に長く、実際の労働時間は日に5－6時間であった。その結果、作業ノルマは達成されていない。」⁶¹

いま一度ウスチ・ラビンスカヤ MTC 政治部に戻れば、それが設立以来精力的に活動したことは疑いないとしても、そのコルホーズ指導はきわめて強引であった。政治部は給食の差別的配分を梃子として500人以上の突撃作業員を創出し、5月中旬に第1回コルホーズ突撃作業員大会を召集したが、そのアピールは次のように激越な調子であった。「われわれの殺し文句（самое резкое слово）は“怠け者と闘え”だ。すべての真面目な、良心的なコルホーズ員に言う、コルホーズ管理部が怠け者について“議論する”時をじっと待つな。即時追放を求めよ……。」彼らはほとんど政治部がみずから選抜したアクチーフで、政治部にとっては「クラーク的統一がなお維持されている作業班に分裂を組織する決定的な手段」であった。見せしめのための“怠け者集会”（代表を選ばせ、演説させる）が開かれたり、“怠け者”に対する罰金が「時には過度でさえあった」といわれるほど乱用されたのは、こうした指導の当然の帰結といってよい。いま一つ注意すべきは、上のアピールからも窺われるコルホーズ管理部に対する軽視で、総じて政治部が直接に作業班を指導したことである。春播き前に、作業班長は政治部への通知、その承認なく解任できないとした点はさすがに「越権」と認めながら止むをえなかったとしているが、政治部はコルホーズ議長等を粛清中でもあり、作業班に対する直接指導を、政治的指導と同時に要求された実務的指導と了解していたように思われる⁶²。

以上のように、春播きカンパニアにおける政治部の役割は何よりも、いわばプリミティブな差別策によるアクチーフの析出、コルホーズ員がともかくも圃場には出るという最低限の労働規律の導入にあった。しかし、そのような規律向上策はコルホーズ粛清、“怠け者”追放と不可分にすすめられ、党・政府からみても行きすぎといわざるをえない事態に至ったのである。

4. 抑圧緩和と調整（33年5－6月）

5月8日付モーロトフ・スターリン連名の秘密指示（全党・ソヴィエト活動家および全 ОГПУ・裁判・検察機関あて）は、1932年11月以来おこなわれてきた大量弾圧の停止を定めた。大量弾圧とは、1929年末にクラークおよびクラークの手下（подкулачник）に対

して適用された大量逮捕および、北部や遠隔の地方への大量追放という形の尖鋭な弾圧形態、1932年にクラーク分子、盗人、サボタージュ者に適用された、いっそう強力な措置のことである。この3年間のクラーク絶滅の闘いによって、コルホーズが農村における「全面的かつ支配的な経営形態」になり、大量弾圧を中止する「新たな、好ましい情勢」が生じた。にもかかわらず、党中央委員会・人民委員会議には約10万家族の州・地方からの即時追放の要請があり、コルホーズ議長および管理部長、村ソヴィエト議長らの無差別大量逮捕がなお続いているという報告が入っている。「新たな情勢を理解せず、いぜん古いやり方を続けている」同志たちが、大衆の中での政治＝組織活動ではなく、「行政的＝チェキスト的“作戦” (административно-чекистская 《операция》)」をとり続けているなら「農村におけるソヴィエト権力の威信を弱める」こと、「農村におけるわが党の影響力を無にする」ことになりかねない。以上の認識に基いて、秘密指示は以下の措置を定めた。① 農戸の追放は個別的手続でのみ、また「コルホーズに対して積極的に闘い、播種・調達拒否を組織化する」首謀者に限って認められる。追放をおこないうる州(地方・共和国)も限定され、州ごとに上限の戸数を示している(連邦合計では12,000戸—その根拠は示していない)。② 逮捕執行の正規化(упорядочение), ③ 拘禁施設の負担軽減(разгрузка, 連邦合計で40万人を越えないこと)⁶³。

この指示の「いっそう強力な措置」とは「黒書」掲載措置であり、その一端はすでにみたが、大量逮捕の実態は公刊資料では知りえない。かつてゼレーニンはアルヒーフ文書から「私の代理は自分の役割をもっぱら逮捕においている」という一政治部長の言葉等を引き、ОГПУ 機関による党の統制を離れた活動を指摘したが、逮捕の規模は明らかでない⁶⁴。筆者は先に、種子窃取や播種ノルマ引き下げ等を「社会主義財産保護法」違反とし、悪質な労働規律違反を刑法で処罰する北カフカス地方党委指令を示したが、その実施状況は『モーロト』にもほとんど報道されなかった⁶⁵。わずかに、6月の同地方司法職員大会におけるジージン(地方党委書記)報告が弾圧の一端を明らかにしている。すなわち、ヴォーシェンスキー地区検事補佐は「播種の最中6日間も、何の根拠もなく53人ものコルホーズ員を逮捕・拘留した」こと、モロゾフスキー地区でも同様に30人が逮捕されたこと、裁判所が貧農、コルホーズ員の些細な犯罪に対して、クラークに対するより重い量刑を課したこと、等である⁶⁶。ともあれ、大量逮捕・追放の規模は「ソヴィエト権力の威信を弱める」、「党の影響力を無にする」と党・政府指導者に危機感を抱かせるほどであった。

いま一つ不明なのが、党指導部がいつ、何を契機に大量弾圧停止を判断したか、である。春播きカンパニアの成功裡の進展が条件であることは内田論文も指摘しているが、直接的な契機は公刊資料からは知りえない。下斗米論文のいう、4月27日付北カフカス地方党委ビューロー決定「ヴォーシェンスキー地区における党方針の歪曲について」を転機とする見方は成立しうる。同地区に居住する作家ジョーロホフの4月16日付スターリンあて手紙—大量逮捕、不法な押収、過大な穀物調達に抗議—はさしあたりスターリンの反論を招いたものの⁶⁷、3月23日付『プラウダ』への投書(同地区における馬の惨状について)⁶⁸と合わせて、大量弾圧からの転換を促したという解釈である。地方党委第一書記シェボルダーエフが34年1月の党協議会の報告で「ヴォーシェンスキー事件」を挙げ、抽象的ながら自

己批判し、中央委員会の介入があったことを認めている点が傍証といえよう⁶⁹。

5・8秘密指示の趣旨はさっそく11日付『プラウダ』論説に現われた⁷⁰。そしてモーロトフは、先述のように中ヴォルガ地方コルホーズ突撃作業員大会における演説で、一步踏み込んでコルホーズ員の労働態度の変化を指摘し、大量弾圧の不要性を強調したわけである。

こうした党・政府の政策修正は共和国・地方・州レベルに反映せざるをえない。とくに北カフカスは、春播きの準備・実施で最も苛酷な措置をとっただけに注目される。まず5月14日付『モーロト』は、7日付地方党統制委員会・労農監督部指令を公表した。1月総会決定に基づくコルホーズ粛清の過程で、一連の地区に個々の行きすぎが、貧・中農出身者を除名した点でも、管理部が総会にはからずに除名した点でもみられたことを認めたものである⁷¹。21日に地区党委書記・政治部長に対してラジオ演説したシェボルダーエフは、5・8秘密指示の趣旨を繰り返し、地方党委への報告は「追放、黒書弾圧措置(меры репрессии чёрной доски)の要請ばかりで、いかに大衆活動を改善したか等はほとんど入ってこない」と述べた⁷²。6月19-23日に開かれた地方党委・党統制委合同総会の決定の一つには、自己批判と目される指摘が含まれている。春播き中に現われた活動の主要な欠陥の第一として、「農村における、コルホーズ員大衆の気分における新たな、変化した情勢を自己の活動で適宜に把握、学ぶことができなかった」点が挙げられたのである⁷³。

しかしながら、5・8秘密指示は懲罰活動の放棄を意味するものでは決してなかった。コルホーズ制度が勝利したがゆえに、階級敵は最後の絶望的な抵抗を試みるのであって、「農村における階級闘争は尖鋭化せざるをえない」。大量弾圧という旧来の方法は「これを合理化し、われわれの打撃をいっそう的確に、組織だったものにする」、「あらかじめ政治的に準備し、一撃一撃が広範な農民大衆の行動によって補強される(подкрепляться)ようにする」ということなのである⁷⁴。この「階級闘争尖鋭化」論は1月総会におけるスターリン報告のそれにほかならないが、同報告における「新たな情勢」という認識は、コルホーズ制度の勝利に伴って公認されたコルホーズ商業の否定的影響に力点をおき、コムニストの指導責任と警戒心を強調するもの、その意味で大量弾圧を正当化するものであった⁷⁵。それゆえ、5・8秘密指示は大量弾圧を否定しながらも「階級闘争尖鋭化」を説く点で両義的だっただけでなく、「新たな情勢」に二様の理解を許し、下級党・ソヴィエト機関、司法機関等に当惑と混乱をもたらしたに相違ない。北カフカス党組織が5・8秘密指示から1カ月半もして自己批判をしたのも、このためと思われる。

5・8秘密指示に続く重要な方針は、6月15日付党中央委員会指令「MTC政治部、コルホーズ細胞、および政治部・地区委員会の相互関係について」であった。指令は、政治部の組織化の時期が基本的に完了したこと、春播きの準備・実施をとおして政治部が「コルホーズおよびMTCの組織的強化の事業における最も重要な梃子になった」ことを確認したうえで、「新たな情勢」のもとで政治部による大衆の中での政治＝組織活動の意義が増したと指摘し、農村党組織を地域原則に基く編成から生産原則に基くそれへ移行すべきことを提起した。それは同時に、地区党委員会が多くの場合コルホーズに対する直接的な指導から遊離していること、そこから政治部に対する正しくない、さらには明からさまな

反党的態度が生まれていることへの批判でもあった。① コルホーズ生産細胞（それに準ずる候補グループ，党・コムソモール核（партийнокомсомольское ядро）の設立，常設作業班における党グループの設立，② МТСのサービスを受けているコルホーズでは，細胞等は「1月総会決定の定める諸問題」につき政治部の指導に従うこと，③ 細胞書記の解任・異動，同ビュロー改選等も政治部の所轄であること，④ 地区・州・地方からカンパニア実施のために派遣される活動家も政治部の指示に従うこと，⑤ 政治部と地区委との調整のために政治部長は地区委ビュローのメンバーになること（政治支部長も州・地方委および民族党中央委ビュロー入り）等々の具体的措置が定められた⁷⁶⁾。

コルホーズ細胞の活動については，すでに3月22日付で党中央委員会指令が出されていたが，《イスクラ》，《フペリョート》2コルホーズ細胞の例示で，しかも春播きにおける任務に重点があった⁷⁷⁾。6・15指令は3・22指令の内容を一般化すると同時に，大量弾圧の停止，政治部の組織化完了とともに表面化してきた地区委とのトラブルという新しい事態に対応しようとしたものといえる⁷⁸⁾。

いま一つ注意すべきは，春播きカンパニアの中で広範になされた活動家派遣，全権代表方式を政治部のもとに整序しようとした点である。北カフカスでは「司令部（штаб）」が数多く設けられたようで⁷⁹⁾，6月17-18日の政治部長会議では「地区には2万名の全権代表がいて，その多くが何もしていない」と指摘された⁸⁰⁾。ウクライナ共産党中央委員会は早くも4月28日付指令で，全権代表方式は「コルホーズ細胞の責任を解除し，それに取って代るものである」とし，今後は例外的な場合に限り，派遣人数も制限すると定めていた⁸¹⁾。

ソ連の研究書は，6・15指令以降は政治部の活動の重点が農村党組織の生産原則に基く改編に移り，地区委とのトラブルも解決したと評価しているが，一面的である。地区党委員会は，МТСのサービスを受けていないコルホーズや地域細胞（村ソヴィエト，協同組合，学校，病院等のコムニストが構成）はもとより，村生活の諸問題（ソヴィエト建設，財政，教育，医療等）も指導すると6・15指令で定められたが，政治部との権限争いの余地は残されていた。政治部によるコルホーズ細胞指導の範囲とされた「1月総会決定の定めるМТС活動の諸問題」の解釈に幅があったからにはほかならない⁸²⁾。

しかも，5-6月の過程で党指導部は，大量弾圧こそ停止したものの，その有力な装置であった政治部を地区委に対して優越させ，農村指導の中心と意義づけることにより，温存された「階級闘争尖鋭化」論とともに，懲罰活動の継続を許したとあってよい。党粛清が，4月28日付中央委員会・統制委員会指令，5月20日公表の中央粛清委員会指示により6月1日から開始されたこと⁸³⁾，穀物調達をひかえて前年の失敗を想起させ，階級闘争が強調されたことも，政治的気象という点で影響を与えたものと思われる。

5. 収穫・秋播き期の政治部

さて，春播き，除草，休閑地耕起に続く農業カンパニアは収穫，調達および秋播きであるが，まずその概要をみておく。穀物の収穫・調達は「全般的に好調」で，刈取り，脱

穀は8月31日時点でそれぞれ播種面積の83.8%、37.6%に達し、前年を上回るテンポだったこと⁸⁴⁾、調達に並行する秋播きは10月25日時点で計画の89.8%に達したこと(前年は84.5%)⁸⁵⁾、調達計画達成率は8月31日に50%、11月20日に100%を越え、主要穀作地域における完了は中ヴォルガの10月20日を先頭に、後尾の北カフカスでも12月10日と、前年より2~3カ月も早かったこと⁸⁶⁾、が指摘される。

このようなカンパニアの成功裡の進展は、①春播きに続いて労働規律向上、作業班強化の方策がとられたこと、②収穫防衛の厳しい措置により、前年までのような大規模な穀物窃取が防止されたこと、③党・ソヴィエト機関に対しては、農産物調達委員会(Комзаг)とその地区レベルまでの全権代表、穀物単位収量・総収穫量確定国家委員会(ЦГК)とその地区レベルの下級機関(МГК)による、懲罰も含む調達促進措置がとられたこと、以上の結果である。政治部はたしかに、穀物調達の保障を設立の重要な眼目としたが、直接の指導機関ではなく、Комзаг地区全権代表やМГКへの協力、義務納入法および単位収量の正しい申告についての大衆への説明活動をリードすることが求められ、とくに前者の役割は果たしたといつてよい⁸⁷⁾。

この時期の政治部の活動をウスチ・ラビンスカヤMTC政治部を例にみることにする。まず北カフカス地方レベルでは、6月27日付地方播種委指令が、“怠け者”に対しては1・30決定の罰金・除名のほか、前渡し(作業日に応じた年間報酬の前渡し、穀物を支給)量の削減を、突撃作業員に対してはその割増しを定めた点では、春播きにおける方法を継承している⁸⁸⁾。7月2日付地方党委指令は、政治支部提案に基づき、児童をコムソモールの指導下に収穫防衛に引き入れることを定め、「軽騎兵(легкая кавалерия)」運動の発端を開いた⁸⁹⁾。22日付『モーロト』に掲載されたシテインガルトの全政治部長あて指示は「真のポリシェヴィキ的」規律・テンポ・競争を強調し、人的・物的資源・能力のフル動員とクラークおよびクラーク代理人との仮借なき闘いを訴えたものである⁹⁰⁾。

ウスチ・ラビンスカヤMTC政治部は「社会主義財産保護法」の説明活動をおこなうとともに、全作業班に巡回係を設け、櫓を立て、そこに監視台を置いた。圃場には児童たちを見張りに立て、付近の道では臨検をおこなった。収穫作業では作業班を小グループ(загонと呼ばれた)に分け、刈取機だけでなく鎌による手作業もおこない、突撃作業員が刈取りの先頭に立った。刈取りは8月5日までに25労働日(рабочий день)で完了する計画のもと、地方レベルの競争にも参加する形ですすめられ、全コルホーズの4分の3が期限前に完了した。刈り取られた穀物は直ちに結束、山積みされ、刈取り開始6日後には脱穀に入り、脱穀場から倉庫へ搬入された。調達計画(義務納入およびMTCサービス料現物支払い計12万ツェントネル、前年実績5万ツェントネル)は10月1日までに達成された。以上の過程で政治部は春播きと同じく作業班を直接に指導し、全コルホーズが刈取りを終えた時点で(8月10日に)第3回コルホーズ突撃作業員大会を召集した。ある遅れたコルホーズでは、総会を開かせて管理部を更送し、二人の作業班長を罷免した。コルホーズ員を強要して粉を雌牛と交換した前議長の間、**「クラークの手下」**の一部は逮捕された。政治部長代理はそのまま留まって突撃作業運動(ударничество)を組織した。刈取機を故障させようとした二人の**「クラークの手下」**を摘発し、全コルホーズに引き回したう

え民警に引き渡した。こうして、このコルホーズは先進的コルホーズに数えられるようになった⁹¹⁾。

ところで、この政治部の報告ではまったく触れられていないが、収穫・秋播き期に表面化してきたのが宅地付属地の問題、そこでのコルホーズ員の仕事が社会化経営の労働規律向上の障害になっていることへの注目である。すでに春播き期にも“怠け者”の一タイプとして「菜園と牛は自分のものだから大切に使うが、コルホーズのそれはどうでもよい」という態度のコルホーズ員があり、こうした「菜園の気分 (огородные настроения)」が遅れたコルホーズ員の間で支配的であり、圃場には子ども、付属地には大人が出ていると、ウクライナ・ドニエプロペトロフスク州等から報告されていた⁹²⁾。6月22日付『プラウダ』論説は義務納入を成功させる諸条件を述べたものだが、コルホーズ員による付属地への穀物播種が多く、とくにウクライナ、北カフカス、中央黒土州でみられると指摘し、これへの義務納入法の適用を一条件として挙げている⁹³⁾。収穫カンパニアに入ると、コルホーズ員が付属地からの収穫に力を入れ、社会化経営の仕事に出る人数が減ったり、大幅な遅刻がみられることが数多く報告されるようになった⁹⁴⁾。

前年11月初めからコルホーズに対する大量弾圧が続いている間は、党指導部の中でこの問題に言及する者はいなかったが⁹⁵⁾、8月下旬に中央黒土州の春播きと収穫を総括する論文を『プラウダ』に寄せたヴァレイキス(同州党委第一書記、中央委員)が初めて言及した。コルホーズの労働組織の欠陥として、作業日の少ないコルホーズ員がかなりいることを挙げ、「彼らは怠け者だが、一部の者は自分の宅地付属地の方に関心がある……ためという説明はある程度正しい」と認めたのである⁹⁶⁾。しかし、この時点では、もともと30年定款において不十分にしか規定されていない付属地経営の権利⁹⁷⁾を保障し、そのうえで社会化経営に従属したものとして規制するという政策は提起されなかった。党・政府の付属地にかかわる政策は、6月21日付および34年4月3日付人民委員会議・党中央委員会指令、つまり義務納入面からの規制という程度であった⁹⁸⁾。

むしろ、中央紙の関心は付属地が大きく、穀物が播種されていること、従ってコルホーズ員の自家消費用の副業という性格が失われかねないことに向けられ、前項末尾で指摘したような政治的気象のもとでは、付属地経営はクラーク的だとの論調に傾きがちであった。たとえば中央黒土州については『プラウダ』、『社会主義農業』が一度ずつ大きくとりあげた。挙げられた地区は異なるが、共通する指摘は、「宅地付属地がもはや副業経営ではなくなっている」こと(むろん穀物を播種)、その耕作のためにコルホーズの馬や農具が用いられていること、個人農ないしコルホーズ員を雇傭するケースもみられること、である。これらはそれぞれ政治部長の報告、政治部長によるコルホーズ議長の裁判への引渡しに寄せた記事であり、前者はとくに「本物のクラーク経営」を含む「クラーク的行動」という判断を示し、これと闘うよう訴えている⁹⁹⁾。

先に、5・8秘密指示をめぐって下級機関で混乱が避けられなかったと指摘したが、10月5日付『プラウダ』の論文「現段階の農村における階級闘争の特質について」がそれを示している。すなわち、ウクライナ・キーエフ州の一地区の党委・統制委合同総会では、現段階の重点は怠業・窃取との闘いか、クラークとの闘いかという論争があった。論文は

「怠業・窃取はクラークの活動の結果ゆえ、クラークに制裁を加えれば怠け者や盗人を扱うのは難しくない」なる主張を、大衆活動・政治教育との結合を見落していると批判しているが、そのような主張と実践が広範にみられたからこそ、一地区の件が上記タイトルを付して大きくとりあげられたものと思われる¹⁰⁰⁾。このことを裏付けるのが、10月9日付ソ連邦検事・農業人民委員部政治本部長・ソフホーズ人民委員部政治本部長代理連名の秘密命令である。それによれば、「階級敵と代理人に容赦ない打撃を与えるべきであるのに、弾圧措置の適用が許し難いほど弱いと、多くの政治部が訴えている」。「他方では、若干の政治部長が裁判・検察機関の実務的活動に干渉し、根拠のない予防拘禁を提議したり、ソフホーズに拘禁施設を設ける等の正しくない行動が報告されている。」¹⁰¹⁾

このように、収穫・秋播き期にもコルホーズに対する懲罰活動は継続し、政治部は大きな役割を果たした。“怠け者”に対する罰金賦課は、付属地労働＝クラーク的な認識とも相まって継続され、のちに「コルホーズ員の実際の稼ぎが3分の1ないし半分、否それ以上も減ってしまうほどの重大な行きすぎもある」と批判されるくらい乱用された¹⁰²⁾。また“怠け者”に対する恥ずかしめ、コルホーズ員大衆への見せしめ的手段として“怠け者勲章”や“怠け者集会”が広く用いられた¹⁰³⁾。穀物窃取に対する裁判所の処罰は「多くの事件で十分に果断だった」とされたが、他方では「弾圧措置の機械的な適用」も指摘され¹⁰⁴⁾、のちには、「社会主義財産保護法」の適用は減じたものの、窃取の首謀者でない者に適用したり、些細な盗みを同法違反としたりする誤りが批判された¹⁰⁵⁾。政治部は、5月26日付ロシア共和国司法人民委員部指令によって司法機関との緊密な協力を指示され、地区レベルでは判事、検事が当該ソフホーズ、MTCに配属されることになっただけに¹⁰⁶⁾、上の10.9秘密命令で指摘されたように、懲罰活動を推進したものと思われる。

以上のような懲罰活動の展開と並行し、これを促進したのが党粛清、農業機関・コルホーズ装置の粛清である。党粛清は紙幅の都合で割愛し、コルホーズ装置の粛清は政治部の最初の活動として触れたので、ここでは次の二点を指摘するに留める。まず、コルホーズ員大衆まで点検の対象になったことは各地からの報告にみられ、中ヴォルガではコルホーズの「自己粛清(самоочистка)」が¹⁰⁷⁾、西シベリアでは「コルホーズ清掃(очищение)」の闘いは、全員に及ぶ大量粛清の、多くの現場では左翼的歪曲および行き過ぎの形をとっている¹⁰⁸⁾ことが認められた。次に、その規模は、17回党大会における政治本部長クリニツキーの報告によれば、コルホーズ議長で粛清(党を除名)された者14%、罷免された者36%、合計50%にのぼり、経理主任も両者計47%に達した¹⁰⁹⁾。

6. 政治部をめぐる議論 (34年前半)

このような政治部の活動とその結果に対して、しだいに批判的な意見が窺われるようになる。それは地区党委員会との相互関係の問題の再燃という形をとって17回党大会直前から現われるのだが(塩川論文)、実は、さらにその徴候ともいえるべき主張を見出すことができる。

9月11日付『ヴェスティ』論説は、「地域党細胞を強化せよ」というタイトルからして

注目される。この時点では6・15指令に従い農村党組織の生産原則に基く改編が進行中で、中央紙・誌の報道もそこに重点をおいてたからである。論説は政治部の貢献と6・15指令実行の成果を挙げたあと、地域細胞の仕事はかなり悪く、地区委はこれを指導していないと述べ、地域細胞の任務として村ソヴィエトの活動に対する指導を挙げ、その活動の中心をなすのが個人農との協同であると指摘した。この論説は、① 政治部によるコルホーズ指導、生産細胞への改編の強調のもとで、いわばスポイルされていた村ソヴィエトの強化を主張した点で、② 同じく個人農の問題をとりあげた点で、③ 調達カンパニア期に必ず強調される階級闘争が一言も触れられず、むしろ「コルホーズ員の文化的欲求の充足」こそ村細胞の最重要の任務の一つとしている点で、支配的見解とは異なっている¹¹⁰⁾。

この頃から村ソヴィエト強化論が登場し始める。9月15日付『イズヴェスチヤ』には、カリーニン（ソ連邦中央執行委員会議長）の西部州先進的ソヴィエト集会における演説が掲載された。穀物調達の順調な進展を背景に、村ソヴィエトがコルホーズを指導すべきことを強調し、かつそれが国家権力の下部機関であるだけでなく選挙制の代表機関であること、また「農民大衆へのサービス機関」でもあることに注意を促したものである¹¹¹⁾。『ソヴィエト権力』誌第20号（10月1日付）の一論文は「村ソヴィエトの役割の過小評価に終止符を」と題され、全面的集団化期に現われた村ソヴィエト清算論を想起しつつ、地方組織にさえみられる村ソヴィエトの過小評価を改めるよう主張している¹¹²⁾。

もとより、農村党組織の生産原則に基く改編、コルホーズ細胞建設と村ソヴィエト強化とは論理的には矛盾しない。しかし、前者の推進主体が政治部であり、MTC サービス地域ではコルホーズに対して排他的な政治的・経済的指導をおこなっていた以上、村ソヴィエトがコルホーズから遊離するのも無理はない。約半年後の資料だが、『ソヴィエト権力』誌の一論文によれば、カバルディノ・バルカル自治州では、政治部の強化とともに「地区委から一連の機能が政治部に移ったので、ソヴィエトはなおさらコルホーズ生産でやることがない」という気分が広がった。村ソヴィエトの中には、その役割を個人農との協同に限定されたものや、文化建設の仕事のコルホーズ管理部に譲渡したものさえある¹¹³⁾。

17回党大会（1934年1月26日－2月10日）の直前および最中の政治部をめぐる——カガノーヴィチ組織テーゼ草案にかかわる——議論については、すでに塩川論文による詳細な紹介があるので、若干の補足をおこない、筆者の見方を示すに留める。

まず『プラウダ』討論欄における政治部関係の議論、とくに地区委との相互関係をめぐるテレシヨフ vs アンフィロフィエフ論争は、塩川論文のいうように、地区委解消＝政治部一本化論が後退し、地区委を政治部の活動方法に則り、地区規模の縮小を伴って再編成すべきことで、従っておよそテーゼ草案の線でまとまったとみることができる¹¹⁴⁾。ここで注意してよいのは、アンフィロフィエフがテレシヨフへの反論として、地区委を解消して政治部がみずから地区委になると「階級敵根絶の主要な任務から離れてしまう」と述べた点で、はからずも政治部の実態を語ったといえよう。

党大会における討論——スターリン政治報告をめぐるそれも含む——について、塩川論文は両報告のほか、クリニツキー（政治本部長）、エイヘ（西シベリア地方党委第一書記）、ヴァレイキス（同じく中央黒土州）、シェボルダーエフ（アゾフ・黒海地方＝旧北カフカ

ス地方の一部)、それにカリーニンの発言を検討し、政治部に対する懐疑論の存在が示唆されるにとどまったとしているが、発言者全体をみれば、政治部に対する黙殺というべきであろう。主だった地方党指導者のうち政治部を賞讃したのは、エイヘ、コシオール(ウクライナ)、ニコラーエヴァ(西シベリア)くらいで、ポストゥイシェフ、ハターエヴィチ、シリフテル、ペトロフスキー(いずれもウクライナ)、ヴァレイキス、プトゥーハ(スターリングラード地方=旧下ヴォルガ地方の一部)は一言も触れなかった。シューブリコフ(中ヴォルガ)はヤーコヴレフ(農業人民委員)発言——農業人民委員部装置の欠陥を認め、その是正における政治部および中央委農業部の役割を評価した点——につき「政治部への過信」と釘をさした。またカリーニンは、MTCとコルホーズとの関係を「安定させる」必要があり、何らかの「審判的形態(процессальная форма)」を設けるべきだと述べ、口をさしはさんだカガーノヴィチが「適法性を確立する(Законность установить)?」と尋ねたのに対し、これを肯定した。少なくとも、政治部によるコルホーズへの過度の干渉を暗に認めたやりとりといっってよい¹¹⁵⁾。

カガノーヴィチ草案、とくに政治部に関する項目がいかなる動機、経緯で作成されたかはむろん知りえない。その折衷的な内容は、同じく折衷的な大会での報告ともども、一部に字句修正を付して承認、採択された。「地区委員会の活動を生産課題への接近に応じて改造する。地域党組織および村ソヴェートに対する、そして政治部と協力しての、地区全体のコルホーズ組織に対する地区委員会の具体的指導を強化する。」「今後とも社会主義建設の遅れた部門に政治部を設立し、その突撃的任務の遂行に応じて、生産=地域指標に則った通常の党機関に転化するよう、中央委員会に委任する。」「MTC地域の新たな経済センターの形成に応じて、新しい独自の地区、もしくはMTCセンターが弱い場合は分区(подрайон)を設立し、MTC政治部を必要に応じて地区委員会もしくは分区委員会(подрайком)に改組するよう、中央委員会に委任する。」¹¹⁶⁾

大会討議における政治部黙殺は、会期中の新聞報道にも反映した。1月30日付『プラウダ』論説「農業の力強い開花へ」は、1933年が農業の「転換の年」だったとし、それがスターリンのスローガン「コルホーズをポリシェヴィキ的に、コルホーズ員を豊かに」の実現であったとは述べても、政治部には一言も触れなかった¹¹⁷⁾。2月3日に公表されたウクライナ共産党第12回大会(1月18-23日)決議「コルホーズ・ソフホーズ建設の任務」は、その前文において政治部の貢献に一カ所しか触れず、本文第1項「コルホーズ建設の指導改善」では、政治部はMTC、農村党組織と並行して指導主体とされたにすぎない。しかも、決議は技術修得、収量向上、畜産振興などの実務的内容に力点をおいたものである¹¹⁸⁾。アゾフ・黒海地方も、大会に先立つ地方党協議会では政治部をめぐる意見の対立があったようだが¹¹⁹⁾、1月30日に公表されたラーリン(地方執行委議長)報告「春播きにおけるコルホーズ、ソフホーズの任務」は、労働規律向上策で大量罰金の行きすぎがあったことを認める、かつ実務的な内容であった¹²⁰⁾。

こうして1934年の春播きカンパニアでは、前年とは大きく異なって政治部の活動・指導がほとんど触れられなくなった¹²¹⁾。労働規律向上策はおおむね1・30決定、3・17指令と地方ごとの労働規則に沿ったものとみてよく¹²²⁾、もはや「黒書」掲載措置や「社会主

義財産保護法」の拡大解釈的適用はまったく報じられなくなった。そして春播きの順調な進展に応じて¹²³⁾、一方では村ソヴィエト強化論が、他方では政治部に対する批判が、すでにみたように連動しつつ高まってくる。

3月から4月にかけて村ソヴィエト強化の論陣を張ったのはカーニン、ハターエヴィチである。ハターエヴィチ（ドニエプロペトロフスク州党委第一書記、中央委員）は、「村ソヴィエトはここ数年、権力機関としては活動を改善してきたが、大衆組織としての活動はいぜんとして悪い。……農村で続いた階級闘争との関係で、村ソヴィエトの選挙制が侵犯されてしまった」と率直に指摘した¹²⁴⁾。カーニンは「日常の実際活動では、村ソヴィエトと他の組織との間に少なからぬ衝突がある」と指摘し、「他の組織」として全権代表、指導員（инструктор）を挙げた。彼らは「むき出しの行政命令的方法と、大衆の中での政治＝組織活動との深い違いがしばしばわかっていない」と批判し、政治部はあくまで村ソヴィエトが依拠すべきものとしているが、政治部は「村ソヴィエト議長とコルホーズ議長とのジンテーゼのようなもの」という性格規定は政治的に微妙である。コルホーズが経営組織として確立し、村ソヴィエトが真に「ソヴィエト権力の代表者」としてこれを指導できるようなれば、政治部は不要になるという含意を読みとれなくもないからである¹²⁵⁾。

他方、4月8日付『モーロト』には、一部の地区委および政治部がコルホーズの収入分配の遅れを放置し、コルホーズ員の物質的福利を過小評価していることを批判する地方党委書記の論文が掲載された¹²⁶⁾。15日付『プラウダ』のアゾフ・黒海地方における春播きについての論文は、前年より順調なことを認めたらうで、コルホーズの仕事に出ない者の割合が増したことを指摘し、しかもこれへの対策としての、前年に政治部が普及させた“怠け者会議”を初めて批判した¹²⁷⁾。この批判はついに、5月3日付党中央委員会指令となって現われた。チェチェノ・イングーシ自治州（北カフカス）委員会による“怠け者大会”召集、アゾフ・黒海地方テムリュクスカヤ MTC 政治部による“怠け者および仮病使いの葬式”実施を、コルホーズの規律強化の活動、コルホーズ員の間での政治活動の歪曲と非難し、責任者を処分したのである¹²⁸⁾。

党・政府がどの時点で、政治部の通常党機関への改組、農村におけるソヴィエト制度の正常化を判断したのかは定かでない。しかし、5月15日付『プラウダ』論説は政治部の評価を相対化し、すすんでコルホーズへの行政命令的指導をとりあげた点で注目に値する。

「農村党組織は〔地区委はもとより、政治部さえ〕もっぱら経済問題に没頭し、この問題の成功裡の解決のためには党内活動の活性化がきわめて大きな意義をもつことを忘れている。」つまり、農業カンパニア遂行に傾いて「系統的な党＝大衆活動」を十分に保障せず、コルホーズで“突然”失敗や何らかの“事件”が起ると、人々に正しく活動するよう教えるより、むしろ罷免し、除名し、行政的に命令する方を選ぶ」というのである¹²⁹⁾。このコルホーズへの行政命令的指導について、より率直な意見を表明したのがハターエヴィチである。「今春の教訓」と題する論文は、とうもろこしの播種のような問題は州レベルから指示すべきものではないが、コルホーズ指導者による下からのイニシアチブは発揮されていないと指摘した。彼らによる物事への「お役人的アプローチ」はしかし、われわれに責任があろう。なぜなら「いたずらに人々を処罰してきた（наказывали людей зря）」

ため、彼らは罰せられることを怖れて何もしようとせず、命令どおりに動くようになって
いるからである。論文は「われわれ」を特定しておらず、命令どおりに動く人物として作
業班長を挙げているだけだが、ウスチ・ラビンスカヤ MTC 政治部の例を想起すれば、こ
れは政治部への暗黙の批判であるといつてよい¹³⁰⁾。

政治部による行政命令的・懲罰的指導がコルホーズ建設を妨げ、村ソヴィエト強化に背
馳するという批判が、未だ公然かつ全面的とはいえないものの、これだけ出されれば、17
回党大会ではなお曖昧だった政治部改組が急がれるのは当然であろう。6月29日から7月
1日にかけての党中央委員会総会（議題：穀物・食肉義務納入および畜産の改善・振興）
に接続する形で開かれた指導的党活動家会議は、あらためて集団化を主要議題とするど
もに、「政治部を年内に廃止できるか」を論じ、少なくとも近い将来の廃止で一致をみ
た¹³¹⁾。

この会議の概要を最近明らかにしたアブラーモフ論文によれば、集団化（この時点で全
農戸の71.4%）をめぐる会議の状況は次のようであった。会議に向けて中央委員会農業部
がおこなった調査によれば、1933年から34年前半にかけての集団化率の上昇は、個人農の
都市移住、ソフホーズへの雇傭によるもので、一部のコルホーズ脱退を上回る規模であっ
た。個人農のうち宅地付属地だけに播種してソフホーズに雇傭されている者、付属地へ
の播種さえせず、非生産部門の賃仕事（馬車業など）に従事している者は、農業税や農産
物義務納入を免れて高い収入を得、コルホーズに加入しないばかりか、堅固でないコルホ
ーズ員を動揺させ、その脱退をしばしば引き起している。こうした個人農を村ソヴィエト
は放置し、それどころか「奨励する正しくない傾向」さえみられるが、これは党組織が村
ソヴィエト活動のコントロールを手放したからである。一部の党活動家は、個人農との協
同は村ソヴィエトだけで、党組織はコルホーズ活動にたずさわらねばならないと考えてい
る。他方、根拠のない、また定款の手續に則らないコルホーズからの除名の「著しい普及
(значительное распространение)」が農民のコルホーズ加入を妨げている（北カフカス
では、除名のうち総会の承認をへないものは65%）。以上のような認識のもと、出席した
スターリンは「コルホーズ民主主義の歪曲」との闘いを全面的に強化し、アルテリ定款を
遵守し、村ソヴィエトへの指導を改善するよう勧告した¹³²⁾。

論文は「この会議で大きな位置を占めた」宅地付属地の規模の問題も、政治部の問題も
それぞれ数行だけ、しかも上の文脈とは別に述べているが、本項までの内容に照らせば関
連させて捉えるべきである。繰り返せば、政治部を中心とした行政命令的・懲罰的指導が
一方で大量のコルホーズ除名を、他方で地区・村の党・ソヴィエト機関、とくに村ソヴィ
エトをスポイルすることによる個人農の放置を、もたらしたのである。後者の点を曖昧な
がら認めたのが7月10日付『ブラウダ』論説で、「多くの政治部の重大な誤りは、村ソヴィ
エトから離れ、個人農をコルホーズに引き入れていない点にある」と述べている¹³³⁾。

コルホーズ員の付属地経営について付言すれば、この会議の頃はもはや、前年秋までの
ようにクラーク的とする報道はみられなくなった。もとより、規模が大きく、穀物を播種
し、個人農まで雇傭すること、社会化経営の仕事にはあまり出ず、コルホーズ員の特典だ
けは受けていることは放置されなかった。4・30指令で義務納入ノルマが個人農並みに引

き上げられ、また上の会議で付属地面積の上限が議論された所以である。この会議でスターリンとともに、多くの州・地方委書記による0.5haを連邦一律の上限とする主張に反対したキーロフは、しばらく後に従来とは異なる付属地経営の見方を示した。付属地経営の方に熱心なメンバーが多いコルホーズは「外見はコルホーズでも、本質的には個人農が住み、個人農のやり方で(на единоличных началах)働いているコルホーズ」である¹³⁴⁾。従来は“コルホーズ員のクラーク化”と非難された、その同じ事態をいわば“コルホーズ員の個人農化”と規定したのは、前者が懲罰活動への傾斜をもたらし、集団化を脅かし、労働規律向上の目的も果たせなくなるから、とみてよい¹³⁵⁾。

クラーク規定を後景に退けた、いま一つの理由は、5月27日付中央執行委員会指令による旧クラークの市民権回復促進にみられる、ソヴィエト改選→第7回ソ連邦ソヴィエト大会召集→新憲法草案作成という、党・政府の設定した政治路線にあるものと思われる(ソヴィエト大会召集の中執指令は7月7日付)¹³⁶⁾。そして“クラーク化”から“個人農化”へと認識を変えたことは、コルホーズ員の個人農的側面——宅地付属地経営と個人所有家畜の養育——を定款上の明確な権利として保護することへと道を開いたのである。

おわりに

以上で、MTC 政治部をコルホーズに対する指導の実態に踏み込み、とくに農業カンパニアにおける労働規律の問題に焦点をあてて分析する本稿の課題は、一応果たされたと考える。政治部はコルホーズに最低限の労働規律を導入することに成功したが、それが懲罰措置なしには達成しえなかったことから、またアクチーフを創出し、これに直接に依拠してカンパニアを遂行したことから、コルホーズの建前としての自治団体性を従来にもまして剥奪し、集団化推進どころか、これを脅かすに至ったとき、設立当初より問題であった地区委との軋轢・対立の解決と合わせて、廃止(改組)が判断されたということである。

本稿ではしかし、農業カンパニアに焦点をあてた反面、内田論文が包括的に考察した農村党組織の分析に立ち入ることはできなかった。ことにアクチーフについては、析出の過程を明らかにしえたまでで、その後のコルホーズ細胞や一般コルホーズ員との関係——政治部改組および35年定款によるコルホーズ組織の整備の意義を全面的に解き明かすのに不可欠な側面——は、検討課題として残った¹³⁷⁾。また、本稿は政治部の実態分析を主要穀作地域に限定したが——数量的にも、政治的比重の点でも妥当と思われるが——、その中でも北カフカスとウクライナ、あるいは中ヴォルガにおける政治部の活動の差異は何に由来するのか、とくに検討しなかった¹³⁸⁾。

最後に、1年余の政治部の活動が農村にもたらしたものは何か、また何が課題として党・政府に残されたのか、一言述べておく。政治部がともかくコルホーズにアクチーフ(突撃作業員)を創出し、コムニストを生産現場に配置し、もって農業カンパニア遂行を保障し、そのスタイルを確立したことはたしかである。しかし、まさにこの活動によって直面したのが、コルホーズ員の付属地経営への執着に基く、社会化経営に対する消極性にほかならず、しかも、これをクラーク的として抑圧するのはむしろマイナスであることが明ら

かになった。コルホーズの労働規律維持と付属地経営の保障という、矛盾を孕んだ問題は、政治部改組を正式に決定した11月25-28日の党中央委員会総会で議論され、1935年2月11-17日の第2回全連邦コルホーズ突撃作業員大会における30年定款の改正で、さしあたりの解決を与えられた。「さしあたり」というのは、この問題は各コルホーズが自己の定款を作成・登録する過程（35年6月-36年夏）で、さらには30年代末にも再燃するからである¹³⁹⁾。

—注—

- 1) В. П. Данилов, Н. А. Ивницкий, “Ленинский кооперативный план и его осуществление в СССР,” в кн. *Очерки истории коллективизации сельского хозяйства в союзных республиках*, М., 1963, стр. 57-58; И. Е. Зеленин, “Политотделы МТС (1933-1934гг.),” *Исторические записки*, №76 (1965), стр. 42-61.
- 2) С. А. Юдачев, *Борьба КПСС за организационно-хозяйственное укрепление колхозов*, М. 1962; К. Г. Левыкин, *КПСС—организатор колхозного производства в годы второй пятилетки (1933-1937)*, М. 1969; Г. А. Чигринов, *Борьба КПСС за организационно-хозяйственное укрепление колхозов в довоенные годы*, М., 1970; Т. С. Донгарова, *Чрезвычайные органы партии (О политотделах МТС)*, М., 1976. なお各共和国・地方・州の政治部に関する研究論文が1950年代から多数書かれたが、とくに有益な情報がないので省略する。
- 3) 赤軍政治部は、部隊内の党活動は地方党委員会にはできないとの判断から党機能を一元的に吸収し、かつ規律維持のための懲罰機関を付置したものである。Ю. П. Петров, *Партийное строительство в советской армии и флоте: Деятельность КПСС по созданию и укреплению парторганов, партийных и комсомольских организации в вооруженных силах 1918-1961 гг.*, М., 1964, стр. 45,51.
- 4) 注6) 塩川論文参照。
- 5) Robert F. Miller, *One Hundred Thousand Tractors: The MTS and the Development of Controls in Soviet Agriculture*, Harvard University Press, 1970.
- 6) 塩川伸明「1930年代ソ連における政策論争に関する一試論 — 第17回党大会前後(2)」, 『社会科学研究』(東京大学), 第32巻第2号(1980年2月), 108-165頁。なお、政治部のコルホーズに対する指導をとくに分析していないにもかかわらず、キーロフ演説を典拠に「МТСおよび政治部が特に生産に関わる指導において十分にその役割を果たしていない」(142頁)とするのは、やや安易な判断である。
- 7) 下斗米伸夫「コルホーズ体制の危機と政治部の導入 — 党機構の対応を中心に」, 溪内謙編著『ソヴェト政治秩序の形成過程 — 1920年代から30年代へ』, 岩波書店, 1984年, 171-213頁。Nobuo Shimotomai, “Springtime for the Politotdel: Local Party Organization in Crisis,” *ACTA SLAVICA IAPONICA*, Tomus IV, 1986. なお、同論文の弱点は政治部廃止の論理が明示されていないことである。

- 8) 内田健二「スターリン政治体制下の農村における統治体制の再編 — 1931-1934年」, 『スラヴ研究』, 第29号 (1982年), 71-121頁。および同名の博士論文 (東京大学法学部)。
- 9) 農業カンパニアのうち最も重視された穀物調達については, 富田武「穀物義務納入制とコルホーズ — 飢饉から配給制廃止まで」, 前掲溪内編著, 215-252頁。
- 10) *Вісті (орган Всеукраїнського Центрального Виконавчого Комітету Рад робітничих, селянських та червоноармійських депутатів)*. 但し, 1934年3月など欠号がある。*Молот (орган Северо-Кавказского [далее: Азово-Черноморского] крайкома ВКП(б), крайисполкома и крайсовпрофа)*. 但し, 1933年1, 2, 9月, 34年6月前半など欠号がかなりある。いずれもアメリカ議会図書館より入手した。現物はアメリカ議会図書館にある。
- 11) Михаил Каравай, *Политотдел, М., 1934*.
- 12) 政治部導入の背景, 経緯については富田武「穀物調達とコルホーズ — 1933年初頭の政策転換に関する一考察」, 『歴史学研究』, 第505号 (1982年6月), 1-18, 59頁。
- 13) *КПСС в резолюциях и решениях съездов, конференции и пленумов ЦК*, изд.7-е, т.5, стр. 78-87.
- 14) *КПСС в резолюциях...*, стр. 87-88. 2名の追加は後述6.15指令に基くが, その充員・派遣はさらに遅かった。*Правда*, 15 августа 1933.
- 15) Зеленин, Указ. статья, стр. 45. 第一, 二代理の呼称は33年7月10日付 ОГПУ 部長代理. 農業人民委員部政治本部長・ソフホーズ人民委員部政治本部長代理連名の秘密命令による。*The Smolensk Archive (Records of All Union [Russian] Communist Party, Smolensk District, Record Group 1056)* [以下 SA], WKP 253.
- 16) *Материалы о работе политотделов МТС за 1933г., М., 1934*, стр. 204-206. なお, МТСのサービスは33年末でコルホーズの41.2%, 同播種面積の58.7%をカバーしていた (34年末には各45.8%, 63.9%)。И. Е. Зеленин (ответ. ред.), *История советского крестьянства 2; Советское крестьянство в период социалистической реконструкции народного хозяйства, конец 1927-1937, М., 1986*, стр. 297.
- 17) Д. И. Ортенберг, “Полвека назад (Заметки начальника политотдела МТС),” *Вопросы истории КПСС*, №3, 1983, стр.94-95. なお, 同様の叙述として П. Филеев, *Записки начальника политотдела, Ростов-на-Дону, 1934*, стр.5-7.
- 18) *Правда*, 6 марта 1933. 政治本部長クリニキーも「農村, コルホーズ生産を知らなくてもかまわない」と述べた。*Большевик*, №9, 1933, стр. 16.
- 19) *Правда*, 5 февраля 1933.
- 20) *Социалистическое земледелие*, 27 января 1933; *Правда*, 30 января 1933 и т. д.
- 21) *Правда*, 25 января 1933.
- 22) *Правда*, 5 февраля 1933 (Нижняя Волга); *Молот*, 6 марта 1933 и т. д.
- 23) *Правда*, 26 февраля 1933.
- 24) *Правда*, 6 марта; 6 апреля 1933.
- 25) *Правда*, 11 марта 1933.

- 26) 注12) 拙稿
- 27) *Коллективизация сельского хозяйства. Важнейшие постановления коммунистической партии и советского правительства, 1927-1935гг., М., 1957* [以下 *КВ*], стр. 447.
- 28) *Собрание законов и распоряжений Рабоче-Крестьянского Правительства* [以下 *СЗ*], 1933, ст. 116.
- 29) *Правда*, 20, 30 апреля; 10, 20, 30 мая 1933; 20, 21 мая 1932. なお、農業カンパニアは5日間を単位としておこなわれていたから、農業およびソフホーズ人民委員部による集計報告は5日ごとに『*Правда*』等に報道された。
- 30) *Правда*, 20 апреля 1933.
- 31) *Вісті*, 9 квітня 1933.
- 32) *Молот*, 18 марта 1933.
- 33) *Молот*, 26 марта 1933.
- 34) *Молот*, 11 апреля 1933. 但し、その後も「黒書」掲載措置は報じられた。*Молот*, 28 апреля 1933.
- 35) *Правда*, 12 апреля 1933.
- 36) *Правда*, 4 мая 1933.
- 37) *Правда*, 15 мая 1933. これをやや詳しくし、クラークとの闘いにも留意した論文が党理論誌に掲載された(6月末)。*Большевик*, №12, 1933, стр. 32-44.
- 38) *Правда*, 17 мая 1933. なお、ベゼンチューク МТС 下コルホーズ員たちの最初の手紙は *Правда*, 19 января 1933. これにヒントを得てスターリンは、第1回全連邦コルホーズ突撃作業員大会で「コルホーズをポリシェヴィキ的に、コルホーズ員を豊かに」のスローガンを提唱したとみられる。*Первый всесоюзный съезд колхозников-ударников передовых колхозов, 15-19 февраля 1933г. стен ографический отчёт*, М. -Л., 1933, стр. 284-295.
- 39) *Социалистическое земледелие*, 10 июля 1933. ほかに *Правда*, 18 апреля; 28 августа 1933 и т. д.
- 40) 馬の大量斃死については *Правда*, 18 апреля 1933; *Коллективизация сельского хозяйства на Северном Кавказе (1927-1937гг.)*, Краснодар, 1972, стр. 531. 人々の餓死と無力化については最近生々しい写真集が刊行された。*Famine in the Soviet Ukraine 1932-1933: A Memorial Exhibition*, Harvard University Press, 1986.
- 41) コルホーズ装置の粛清を1933年中におこなうべきことは1.30決定にある。*КВ*. стр. 448.
- 42) *Правда*, 25 января 1933, Передовая.
- 43) *Социалистическое земледелие*, 26 февраля 1933. 政治部長たちは派遣前モスクワで自分の任地を「トーチカ」と呼んでいた。*Филеев., Указ. соч., стр. 6.*
- 44) *Социалистическое земледелие*, 24 июня 1933. *Актьерф* (актив) と突撃作業員 (ударник) とは、前者が政治活動上の、後者が経済カンパニア遂行上の積極性を主な指標とする点で区別されるが、実際の用法は混同されていた。
- 45) *Первый всесоюзный съезд колхозников...*, стр. 298.

- 46) *Известия*, 11 апреля 1933; *Правда*, 19 мая 1933; *Коллективизация...на Северном Кавказе*, стр. 531.
- 47) *Історія колективізації сільського господарства Української РСР, 1917-1937рр.*, Київ, 1971. т.3, стор. 226.
- 48) *Известия*, 9 мая 1933; *Молот*, 18 июня 1933 и т. д.
- 49) *Известия*, 11 апреля 1933.
- 50) *Социалистическое земледелие*, 10 июля 1933.
- 51) *Социалистическое земледелие*, 24 июня 1933.
- 52) *Известия*, 12 мая 1933.
- 53) ウスチ・ラビンスキー地区はクバン諸地区で最も豊かな農業地区に数えられたが、1932-33年の穀物調達で厳しい弾圧を受けた。25コルホーズにサービスし、地区のほぼ半分をカバーしていたМТСに政治部が設立されたのは2月半ばである。Каравай, Указ. соч., стр.5-14.
- 54) Каравай, Указ. соч., стр. 36-55.
- 55) *Молот*, 23 апреля; 18 июня 1933.
- 56) *Коллективизация сельского хозяйства в Среднем Поволжье (1927-1937гг.)*, Куйбышев, 1970, стр. 422. 下ヴォルガでもおこなわれ、「一部の地区組織」が抵抗したという。Большевик, №15-16, 1933, стр. 66.
- 57) *Вісті*, 21 травня 1933.
- 58) *Правда*, 9 мая 1933.
- 59) Каравай, Указ. соч., стр. 55, 66.
- 60) *На аграрном фронте*, №3 (май-июнь), 1933, стр. 100-121.
- 61) *Сельскохозяйственный бюллетень*, №4, 1933, стр. 6.
- 62) Каравай, Указ. соч., стр. 24-26, 44-48, 54-55, 27-28. なお、春播き期間中に政治部はコルホーズ議長半数以上を更送した。議長代理、経理主任等の粛清はその後の課題として残ったという。Молот, 21 июня 1933.
- 63) SA, WKP 231.
- 64) Зеленин, Указ. статья, стр.53. 政治部長と ОГПУ 活動担当の第二代理との関係を整序したのが、注15) に示した7・10秘密命令である。
- 65) 先にみた3・25地方党委指令自体に逮捕・起訴の一例を見出せるにすぎない。
- 66) *Молот*, 17 июня 1933.
- 67) フルシチョフが1963年3月8日の文芸講話で明らかにした。Правда, 10, марта 1963; Данилов, Иванцкий, Указ. статья, стр. 55-56.
- 68) *Правда*, 23 марта 1933.
- 69) *Молот*, 23 января 1934.
- 70) *Правда*, 11 мая 1933.
- 71) *Молот*, 14 мая 1933.
- 72) *Молот*, 6 июня 1933.
- 73) *Молот*, 27 июня 1933.

- 74) SA, WKP 231.
- 75) И. В. Сталин, *Сочинения*, т. 13 стр. 212-213, 217-221.
- 76) КПСС в резолюциях..., стр. 108-111.
- 77) KB, стр. 455-459.
- 78) 政治部と地区委とのトラブルは、すでに設立にあたってカガノーヴィチ報告も予想していたが (*Большевик*, №1-2, 1933, стр. 35), 6月に入ると新聞で大きくとりあげられるようになった。*Молот*, 10 июня 1933; *Правда*, 12 июня 1933.
- 79) *Правда*, 10 февраля 1933.
- 80) *Правда*, 20 июня 1933. См. *Молот*, 14,17 мая 1933.
- 81) *Правда*, 6 мая 1933.
- 82) 北カフカス政治部長会議におけるクリニツキー発言によれば、一部の地区委活動家は「政治部が地区委になるか、地区委が政治部になるか」と考えていた (*Правда*, 20 июня 1933), のちの17回党大会前段における議論は、こうした現場の意見の反映である。
- 83) *Правда*, 29 апреля; 20 мая 1933.
- 84) *Правда*, 5, 12 сентября 1933.
- 85) *Правда*, 1 ноября 1933; 1 ноября 1932.
- 86) *На фронте сельскохозяйственных заготовок*, №22, 1933, стр. 2; *Правда*, 16 декабря 1933.
- 87) ②, ③については注9) 拙稿。政治部による秋播き面積過小申告の摘発の例は *Молот*, 21 июня 1933; *На фронте с.-х. заготовок*, №17, 1933, стр. 33 単位収量過小評価の摘発の例は *Социалистическое земледелие*, 18 июня 1933; *Вісті*, 23 липня 1933.
- 88) *Молот*, 30 июня 1933.
- 89) *Молот*, 3 июля 1933; *Правда*, 8 августа 1933.
- 90) *Молот*, 22 июля 1933.
- 91) *Каравай*, Указ. соч., стр. 81-117. 秋播き, 工芸作物の収穫は9-10月にマラリアが流行したため成功しなかったとあり, 叙述も少ない。
- 92) *Социалистическое земледелие*, 1, 8 апреля 1933; *Известия*, 11 апреля 1933; *Правда*, 24 апреля 1933.
- 93) *Правда*, 22 июня 1933.
- 94) *Социалистическое земледелие*, 24 июля, 10, 12, 14 августа 1933; *Правда*, 5, 16 сентября 1933; *Молот*, 22 октября 1933.
- 95) ハターエヴィチが11月2日のハリコフ州における地区党委書記会議での演説で注意を促したのが最後である (注12) 拙稿)。
- 96) *Правда*, 24 августа 1933.
- 97) 「全土地を完全に社会化するさいに, 宅地付属地 (菜園, 庭園等) は個人的利用に残される」と規定されただけで, その性格 (コルホーズ地の一部か否か) は曖昧だった。他方, 面積の規定がなく, 「必要なところでは」コルホーズが変更できるとした点が, 付属地の拡大に利用されたといえる。C3, 1930, ст. 255.

- 98) 二つの指令および、前者から後者への変更については注9) 拙稿。
- 99) *Правда*, 12 октября 1933; *Социалистическое земледелие*, 28 октября 1933. 後者の結論は「極端に大きくなった付属地は削減し、再分配する。上限を設け、副業にふさわしく、商品生産型の穀物経営に転化しないようにする」と提言した。同様の主張で、上限を1人当り1.5-2平方サージェン(5人家族の場合1戸0.34-0.46ha)にするという提言が、17回党大会へ向けた『ブラウダ』討論欄に現われた。*Правда*, 7 января 1934.
- 100) *Правда*, 5 октября 1933.
- 101) SA, WKP 253. 見せしめ裁判の組織化は政治部の任務とされている。
- 102) *Советская юстиция*, №11, 1934, стр. 3. これは34年4月末の第1回全連邦裁判。検察職員会議におけるアクーロフ(ソ連邦検事)報告で、「5. 8指令」以降も大量逮捕が続いたことも認めている。
- 103) *Молот*, 21 июня 1933; *Социалистическое земледелие*, 23, 26 августа 1933; *Правда*, 1 декабря 1933.
- 104) *Советская юстиция*, №15, 1933, стр.6-7; №16, 1933, стр. 4-5.
- 105) *Советская юстиция*, №2, 1934, стр.10; №13, 1934, стр. 2-10.
- 106) *Советская юстиция*, №11, 1933, стр. 3.
- 107) *Партийное строительство*, №13-14, 1933, стр. 27.
- 108) Н. Я. Гушин, *Сибирская деревня на пути к социализму*, Новосибирск, 1973, стр. 349 のアルヒーフ文書。「若干の政治部がクラークの抵抗の規模を過大評価した」ためと著者は判断している。Там же, стр. 356.
- 109) XVII съезд Всесоюзной Коммунистической Партии (б), стенографический отчёт, М., 1934, стр. 139.
- 110) *Вісті*, 11 вересня 1933.
- 111) *Известия*, 15 сентября 1933.
- 112) *Власть советов*, №20, 1933, стр. 30.
- 113) *Власть советов*, №8, 1934, стр. 40.
- 114) *Правда*, 31 декабря 1933; 4, 10, 20 января 1934; 注6) 塩川論文。なお、「政治部の活動方法」を具体的に示すものとして、中ヴォルガ地方政治支部長の論文が討論欄に掲載された。*Правда*, 25 января 1934.
- 115) XVII съезд ВКП (б)..., стр. 43-47 (эixe) и т. д; 注6) 塩川論文。
- 116) *КПСС в резолюциях...*, стр. 156-157.
- 117) *Правда*, 31 января 1934.
- 118) *Вісті*, 3 лютого 1934.
- 119) 政治支部長の発言に窺われる。*Молот*, 26 января 1934.
- 120) *Молот*, 30 января 1934.
- 121) 『ブラウダ』における大きな扱いは次の2例にすぎない。*Правда*, 11, 15 марта 1934.
- 122) アゾフ・黒海地方でもコルホーズ労働規則が2月28日付で決定されたが、前年のウクライナの

それと酷似している。*Молот*, 1 марта 1934. См. *Молот*, 24 марта 1934.

- 123) 春播き計画の達成率は4月5日11.3%, 15日18.4%, 5月1日39.0%, 15日72.5%であった(本文の表と比較せよ)。*Правда*, 11, 20 апреля; 5, 20 мая 1934.
- 124) *Правда*, 14 марта 1934. この5日前には、ハターエヴィチの所轄ドネプロペトロフスク州で、村ソヴィエトによるコルホーズ指導を強調したカリーニンの演説が掲載された。*Правда*, 9 марта 1934.
- 125) *Правда*, 20 апреля 1934. なお、指導員は17回党大会における党装置改組により、地区委(および市委)から派遣された。
- 126) 同地方では、1933年の収入分配を完了していないコルホーズが18%もあった。*Молот*, 8 апреля 1934.
- 127) *Правда*, 15 апреля 1934.
- 128) *Правда*, 4 мая 1934.
- 129) *Правда*, 15 мая 1934.
- 130) *Правда*, 17 июня 1934.
- 131) Б. А. Абрамов, “К изучению истории коллективизации сельского хозяйства,” *Вопросы истории КПСС*, №8, 1982, стр. 45-54.
- 132) Там же. この会議をうけて、個人農は9月27日付法令で臨時税を賦課され(*СЗ*, 1934, ст. 380), さらに1935年の義務納入ノルマも、非МТСコルホーズのその5-10%増しから1.5-2倍へと大きく引き上げられた(*СЗ*, 1935, ст. 91)。スターリンのいわゆる「税の圧力(налоговый пресс)」である。
- 133) *Правда*, 10 июля 1934.
- 134) *На аграрном фронте*, №12, 1934, стр. 8. 10月10日のレニングラードにおける演説。
- 135) もとより、キーロフがそのように明示したわけではない。また、階級闘争を強調する見解が消えたわけでもない。しかし、階級闘争を強調し続ける一理論家が、コルホーズにおけるより個人農の間での活動の方が難しいと、33年1月総会で示されたスターリンの見方を逆転させたことは注目されてよい(*Правда*, 2 октября 1934; *Большевик*, №22, 1934, стр. 28-31)。このスターリンの見方こそ、コルホーズに対する弾圧、懲罰に根拠を与えていたからにはほかならない(註12) 拙稿)。
- 136) *КВ*, стр. 505; *Известия*, 9 июля 1934. この政治路線は“ソヴィエトの春”といわれ、ナチ・ドイツの脅威に対するフランスとの外交的接近、コミンテルンの人民戦線戦術の模索とも連動しているものと思われる。なお、7月10日付中執指令によって連邦内務人民委員部(НКВД)が設立され、合同国家保安本部(ОГПУ)を吸収することになったが(*Известия*, 11 июля 1934), それが政治部改組と有意の関連をもつか否か、今のところ実証できない。
- 137) 政治部カードルはМТС所長代理(政治担当)として、また改編された地区委に入って、大部分が農村に留まったが、彼らとアクチーフとの結びつきはどう変わったのかという問題など。なお、非党員アクチーフは、ある抽出調査によれば、コルホーズ員およびМТС職員の約9%を占めていた。*Материалы о работе...*, стр. 122.

- 138) この差異が農業諸条件によるのか、指導者の政策ないし党中央に対する従属度の相違によるのか、その両方か等。なお、畜産地域や、フォートル的土地利用が集団化以前に支配的だった地域（白ロシア、西部州）における政治部活動の独自性の示唆は Зеленин, Указ. статья, стр. 58-59.
- 139) 1939年5月27日付人民委員会議・党中央委員会指令は、付属地の切取りと義務的最低作業日を定めた。СЗ, 1939, №34, ст. 235.

Kolkhozes under the Rule of MTS Politotdels
— Centering upon the Problems of Labour Discipline —

Takeshi TOMITA

This paper aims to analyze the activities of MTS politotdels (1933-34), especially the aspects of introducing and preserving labour discipline in the agricultural campaigns, and make clear their meanings in the 1930s agricultural-administration history.

The politotdels, set up according to the resolution of CC-CCC plenum on 7-12 January 1933, began to work in the southern area just before the spring sowing campaign. This campaign was under the worst conditions; seed shortage, death and thinness of the horses, the spiritless people because of the famine as the result of the harsh grain procurement. The politotdels, considering the difficulties of the kulak maneuver, purged the alleged kolkhozniks under the the difficulties of the kulak maneuver, purged the alleged kolkhozniks the influence of kulaks and tried to introduce labour discipline into the kolkhozes. In order to introduce labour discipline were issued the union level decrees prescribing the penalization and expulsion of the slackers (the decree on January 30), the prohibition of working outside the villages (the decree on March 17). A harsher measure, so-called “blacklist” (chernaiia doska), was taken in North Caucasus region etc. The kolkhozes whose names were published on the “blacklist” were to be deprived of food aid, purged and the saboteurs were to be evicted into the northern area. The OGPU agents, the second deputy chieives of the politotdels, seemed to take an active role in this operation. Needless to say, such a compulsion or a threat couldn’t stimulate the kolkhozniks’ will to work. So the shock workers (udarniks) were granted a privilege to

have more and better dishes in the public catering (The typical case can be found in the kolkhozes under the rule of Ust'-Labinskaia MTS politotdel). Such a discriminative treatment offended the kolkhozniks at first, but it had an effect to take out them into the socialized fields, because they had been starved and in spring couldn't harvest in their private plots as well as in the socialized fields. Really it was reported that the kolkhozniks began to go to the fields and pararely the spring sowing campaign proceeded better.

The secret instruction on May 8 by Molotov and Stalin ordered to stop the mass arrests and evictions of whole villagers which started in the end of 1929 and were strengthened from November 1932 on. It emphasized the political-organizational activities among the mass. Moreover Molotov pointed out a rapid turn for the better of the kolkhozniks' attitude toward labour in his speech at the Middle Volga kolkhozniks-udarniks congress ("Pravda," 17 May 1933). However the politotdels kept on doing the punitive activities during the harvest-procurement and autumn sowing campaign, though the mass repression disappeared. For the May 8 instruction as before preserved the view of "the exacerbation of class struggle" (Stalin showed at the January plenum), namely the subversive activities in the kolkhozes by the remnants of kulaks. As the harvest campaign went on, it was reported that the kolkhozniks got absorbed in the harvest in their own plots and were absent or too late in the socialized fields. Many politotdels, finding out in the private plots a tendency toward kulak farms, imposed penalties on and expelled the passive kolkhozniks, called "slackers' meetings" as a warning, even arrested the slackers (The inclination of the politotdels to naked repressions can be found in the secret order on October 9 by Akulov, Krinitskii, Zalikin).

According to the CC decree on June 15, the politotdels gained the superiority to the district party committees (raikoms) and the exclusive leadership over the kolkhoz production cells within their own MTS areas. The politotdels, supported by the activists (uderniks), instructing directly the kolkhoz brigades (the kolkhoz management boards were under the purge), concentrated on the enforcement of the agricultural campaigns with above-mentioned punitive activities (The typical case can be found in Ust'-Labinskaia MTS politotdel). This administrative method more thoroughly deprived the kolkhozes of autonomy and the kolkhozniks of initiatives (cf. Khataevich, "Pravda," 17 June 1934). At the same time such an inclination of the politotdels to the kolkhozes spoiled the activities among the individual peasants. It was reported that they did not only enter the kolkhozes, but also

evaded the agricultural taxes and obligatory deliveries, gained higher incomes from various works.

Critical opinions on this situation appeared at first, in autumn as the claims to strengthen the village-soviets. They claimed that the village-soviets should lead the kolkhozes, to say nothing of the individual peasants. At the 17th Party Congress (26 January-10 February 1934), where was raised the problem of relations between the politotdels and the raikoms, many regional party leaders ignored the activities of the politotdels, though never appeared open criticisms. Throughout the spring sowing campaign in 1934 were scarcely reported the activities of the politotdels and in April-May the “slackers meetings” called by them were openly criticized. Thus at the conference of the leading party officials, following the CC plenum (29 June-1 July), were discussed whether they could abolish the politotdels within the year, and they all agreed on the abolition in the near future. Never unexpectedly were pointed out in this conference as the factors of stagnation of the collectivization “the prevalence to a great extent” of expulsions from the kolkhozes (groundless and not following the charters) and the neglect of the individual peasants as well as the village-soviets by the party organizations (by “many politotdels” — “Pravda,” 10 July 1934, Editorial).

Formally the MTS politotdels were abolished (reorganized) according to the resolution of the CC plenum on 25-28 November 1934. Certainly they introduced minimum labor discipline, organized the activists (udarniks) in the kolkhozes, transferred the communists from the offices to the production spots, and so ensured the enforcement of the agricultural campaigns, established its styles. At the same time the contradiction between the preservice of labour discipline in the kolkhozes and the persistence of the kolkhozniks in their private plots proved not to be solved by the punishment, supposing that the latter must grow into kulak farms. It was a solution that the Artel’ Model Charter revised in February 1935 provided the right to farm the private plots more definitely than the 1930 one, but a solution for a while.